

---

# 誰が盗った

へなへなモヘナ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

誰が盗った

### 【Nコード】

N2451C

### 【作者名】

へなへなモへな

### 【あらすじ】

1日の楽しみが奪われた。一体誰が？…多分そんな話。

**(前書き)**

これは別の連載の途中に、気分転換に書きました。  
なので大目に見て、最後まで怒らずに読んでくれたらうれしいで  
す。

誰が盗った

私はいつものように風呂に入り、風呂から出るといつものようにキッチンに向かった。

そこまではいつもの通りだった。

そう、まだこのとき私は上機嫌だったのだ。

それがまさかあんなことになるうとは……

「ない！ ナイ！ 無い！！！」

夜、八時四十三分。私はあまりの衝撃に声に出して叫んだ。

その声を聞き、驚いた妻がキッチンへ慌しく駆けて来る。

「どうしたんですか？」

ドウシタンデスカ？

今『どうしたんですか』と言ったのか？

あまりの衝撃に、そのとき私は上手く聞き取ることが出来なかった。

冷蔵庫のドアを開け、タオル一枚を腰に巻いた格好で呆然と立ち尽くす私は、さぞ滑稽こっけいに映ったことだろう。

放心状態から覚ます大きなくしゃみを一つ 怒り心頭だった私は、妻の質問に答えずドカドカとキッチンを後にした。

寝室に行きパジャマに着替え このくらいの冷静さは取り戻した その足で二階に続く階段下へと向かう。

そして二階に向かって声を張り上げた。

「イチコッ！ ジロウっ！ 今すぐ降りてきなさいっ！」

これほど大きな声は、家の中で発したことはないかもしれない。私の声に驚き、長女と長男が二階から姿を見せた。

「なによお？」

「一体何だよ？」

二人とも顔を見せた途端、揃って小憎らしいばかりに不満を露にした口調で訊いてきた。

「いいから二人ともリビングまで来なさい！」

そのときの私は二人から見れば、威厳に溢れる父親に見えたことだろう。

成長するに従い、私への敬意を失った二人にはちょうど良い。

続いて、心配そうにキッチンから顔を出し、こちらの様子を伺っていた妻にも声を掛ける。

「ツマエ、おまえもリビングに来なさい！」

そう言つと私は颯爽とリビングに向かった。

五分後、リビングに家族四人が集まった。

「一体どうしたんですか？」

「なんなのお。マジ、ウザい！」

「用があるなら早くしろよ」

それぞれが不満の声を上げるの目を閉じながら聞き、私は鼻を鳴らしながら腕を組んだ。

そして三人を順番に見回すと大きく息を吸い込み口を開いた。

「いいか、正直に言いなさい。父さんの……父さんのビールを飲んだのは誰だ？」

怒鳴りたいのをグツと堪え、意識的に静かに問いかける。

静かに問いかける方が凄みを増す状況もあるのだ。

思惑通り、三人が「鳩が豆鉄砲を喰らった」ような顔を見せていた。

いや、正確には二人だ。一人は犯人のはずだ。

「はあ？ 親父なに言ってるの？」

「バツカみたい」

「あなた……」

フッフ、三人共なかなか自然なりアクションじゃないか と言  
いたいのを堪え、神妙な面持ちを保った。

ここで選択は、わずかな間だけ沈黙を保つこと。  
その沈黙が、犯人にプレッシャーを与えるのだ。

充分な間を置き、私は絶妙なタイミングで口を開いた。

「いいか、父さんはアルコールの臭いを調べる真似はしたくない！

そこまで器量が小さいわけじゃない」

そこで一度言葉を区切り、私はもう一度三人を見回す。

「だから正直に言いなさい。正直に言えば怒らない」

そこまで言うと、三人はそれぞれの顔を見合った。

最初に口を開いたのはジロウだ。

「バツカじゃねえ？ 信じらんねえ」

「アタシらを疑ってるの？マジで信じらんない」

「あなた……」

フッフ、思った通りのリアクションだった。

信じられないだと？

だが残念ながら、現在信じてないのは私の方だ。

「分かった。名乗り出ないなら仕方が無い……。今からアリバイ調

査をする！」

拳を振りかざして言い切った私に、三人は目を見開いた。

徐々に気分が良い……。

まず始めに、経緯を順序良く考えていこう。

私は風呂上りのビールを一日の楽しみにしている。

しかし夕食後、今日に限りそのビールが切れているとツマエが言  
った。

私が言うのもなんだが、ツマエは中々良く出来た妻で、そんなこ  
とは今まで一度もなかった。

「今からコンビニに言って買って来ます」

そうツマエが言ったので、ちょうど煙草が切れかけていた私は自分で行くと申し出た。

我ながら良き夫だと思う。

そしてコンビニに行き、煙草と五百mlのビールを1本、それにマヨネーズを買った。

事件にはあまり関係の無いことだが、一応言っておくと、マヨネーズはツマエに頼まれたものだ。

そして帰宅し、キッチンへ向かった。

冷蔵庫のドアを明け、いつもの場所　牛乳パックの横にビールを入れようとしたが、その場所が空いてなかった。別の場所に置いた。

そう鮮明に覚えている……。カニだ。蟹の横に確かに置いたのだ。そうしてリビングに戻り、時計を見たのを覚えている。

時計の針は七時五十五分を差していた。ということは、ビールをしまったのはその時間と考えて間違いないだろう。

その時リビングには、ツマエと娘のイチコ、二人がバラエティ番組を見ていた。

私はソファに腰掛け、新聞を読み始めたのを記憶している。

その約三分後、七時五十八分くらいだろう、ジロウがリビングに入ってきた。

どうやらトイレに入っていたらしい。

そうして八時十二分に私は風呂に向かった。

この時間もハッキリと覚えている。

そして風呂から出た八時四十三分、事件は起きた……。冷蔵庫のビールが無くなっていたのだ。

もちろん、蟹の横にも、いつも置く牛乳パックの横にも見当たらなかった。

よって、八時十二分～八時四十三分の間がビールの持ち出された

時間 いや、『犯行時刻』と言っていいだろう。

私は犯行時刻を頭の中で再確認すると、一人ずつ『アリバイ』を確認することにした。

「これから一人ずつ、アリバイ確認をさせてもらう」

その言葉に子供たちが口汚く批判の声を上げるが、あえてそれは聞き流す。

ツマエは批判の言葉を口にはしないが、何か言いたそうに上目遣いに私を見ていた。

分かっている。私とて我が子を疑いたくはない……しかしっ！

これはハッキリさせなければいけない。

家族とはいえ、人の物を勝手に飲んだ拳句、それを訊かれても正直に言わない。

我が子でも……否、いな断じて否っ！

我が子だからこそ余計にそんな精神を許してはいけない！

決して、私が楽しみにしていたビールだからというだけの問題ではない！

私は決意を固めて咳払いを一つし、子供たちをジロリと見据えた。まずはジロウだ。

ジロウは無類の酒好きで、その点を考えれば限りなく『黒』に近い。

「ジロウ。私が風呂に入ってる八時十二分から四十分の間、どこで何をしていたか言いなさい」

「な、何でだよ！ ふざけんなよ！」

ジロウは慌てふためきながら不平をこぼす。

「いいから言いなさいっ！」

そこで私はピシヤリと言い放ち、ジロウの不平を一蹴した。父の威厳だ。

「……しばらくここにいて、それから二階に行つてたよ！」

口を尖らせながらそう言つと、ジロウはそっぽを向いてしまった。「二階に行ったのは、正確に言えば何分頃だ？　そして二階で何をしてた？」

「なっ……どうしてそ、そ、そんなことまで言わなきゃいけないんだよ」

言葉自体は強気だが、口調はしどろもどろだ。

いきなり本命直撃か？

内心私は落胆した。それではあまりにも骨が無い……。

そんなことを考えながらジロウをジツと見据える。

「ジロウが二階に行ったのは二十四分くらいよ」

ソファの背もたれに肘を突き、そっぽを向きながらイチコがそう答えた。

どうやら、イチコは不本意ながらも協力する気になつたらしいいや、まだ分からん！

イチコはしたたな性格だ。もしかしたら私の心証を良くするため  
の作戦かもしれん。

「……それは確かか？」

「そうよ。だつてちょうどCMになったときで、時計を見たもん  
なるほど……。で、ジロウ、二階で何してた？」

「携帯で電話してたんだよ！」

フフン、どうやらやっとジロウも協力する気になつたようだ。

「誰とだ？」

「何でそんなことまで言わなきゃいけないんだよ！　プライバシー  
の侵害だろー！」

『プライバシー』だと？　学生時代に英語の成績が1だったくせに、  
自分に都合の良い単語だけは覚えおつて！

そう怒鳴つてやりたくなつたが、その言葉を寸でのところで飲み  
込んだ。

尋問する側が冷静さを欠いては犯人の思つツボだ。

「誰と電話していたか言いなさい」

私は意識的に声のトーンを落とし、冷静さを殊更<sup>ことごと</sup>アピールしながら言った。

「ととと、友達だよ！」

声の上擦っている。やはり怪しい。

そこで私は一つの作戦を閃いた。

「おい、ジロウ。携帯が鳴っているぞ？」

「え？」

もちろん着信音など鳴ってはいない。

ジロウは首を傾げながらポケットから携帯を取り出し、着信を確認した。

やはり持っていたか！

最近の若者は携帯を手放さない。

聞くところによると、風呂まで持っていくヤツもいるらしい。

私はその期を見逃さず、ジロウの手から素早く携帯をひったくる。

その行動にジロウを始め、イチコとツマエも啞然としていた。

その隙に着信記録を手早く確認する。

「なっ！ 何してんだよ！！」

ジロウがやっと我に返り、怒鳴りつけてくるが気にしない。

捜査はときに強引さが必要とすることもあるのだ。

犯行時刻に発信履歴は無い。次は着信記録だ。

そして着信記録には

「エイコ？ 八時二十分？」

「返せよ！」

そう怒鳴りながら顔を真っ赤にし、ジロウは私から携帯を奪い取った。

エイコというのが気になったが、どうやらジロウは本当のことを言っていたようだった……。

重苦しい沈黙がリビングを包む。

ジロウもツマエに諭され、やっと落ち着きを取り戻した。

「じゃあ、次はイチコだ」

「あなた……」

何か言いたそうにツマエが声を掛けてくる。

「おまえは黙っていないさい！」

そう一括し、私はイチコに向き直った。

「え……あたしはあ、ずっとTV見てたあ」

「ずっと？ 一度もリビングを出なかったのか？」

「そう」

フフン、それが本当か確かめる手段もすでに考えてある。

私は黙ってテーブルの上にあったりリモコンを取ると、それを操作する。

それはDVDのリモコンだ。

イチコは好きな芸人が出ると、TVで見ているにも関わらずDVD録画をする。

その熱心さを勉強に活かしていれば などと今はそんなことを言っても仕方が無い。

問題は、私が風呂に入る前、新聞を読みながらチラリとTVに目をやったとき、その芸人が映っていたことだ。

そして、当然のようにDVDも稼動していた。今はその動きが静寂を保っていた。

私は勿体つけるようにTVとDVDのリモコンを手に取り、それを手早く操作する。

案の定、風呂に入るときに流れていた番組が録画してあった。

記憶を頼りに、私が風呂に行くときに流れていた場面を映すと、一時停止をしてイチコに質問をする。

「番組はこの後どうなる？」

「はあぁ？」

あからさまにイチコが嫌な顔を見せた。が、そんなことでは怯まない。

「どうなるか答えなさい！」

「え……。たしかあ……」

そのような具合に、ランダムに場面を選択して質問を繰り返したが、イチコの記憶力は中々のモノで、全ての質問に的確に答えた。

「どうやら『ずっとリビングにいた』と言っるのは本当らしい。」

しかし、まだ完全に信じるわけにはいかない。

もちろんジロウもだ。

電話をしていたのは本当だが、それが何分までだったかは分からん。

仮に、ずっと電話をしていても、ビールを取るとは可能だ。

ビールを飲みながらガールフレンドと電話する。その光景を思

い浮かべ、なぜか無性に腹が立った。

ツマエは……それはない！ ツマエは酒の類は一切飲めない。

それと気になることが。それは、三人からは不思議とアルコールの臭いがしないことだ。

ということは、取っただけでまだ飲んでいないのかもしれない。

とりあえず良い打開策が見つからず、沈黙の中で睨み合いが続く。

「ツマエ、おまえはどこにいた」

「あなた……」

また何か言いたそうだが、容疑者がいる中で甘い顔は出来ない。

「いいから言いなさい！」

「……」

ツマエが黙り込んだ。

「ちよつとお、お母さんまで疑うの？ お母さんお酒は飲めないで

しょ！ 最低ええ！」

最低？ おおいに結構。このような状況でなくとも、日頃から『

最低』と言ってくる。

そんな娘に、今さら最低と言われても、鋼のような私の心は折れはしない。

「イチコは黙りなさい！」

私がイチコを一睨みすると、ツマエが重い口を開いた。

「……あなたが出て来る直前まで、ずっとキッチンで洗い物をしてました」

ツマエが低い声でボソリと言った。

一瞬、三人でギクリとする。

明らかに怒っているときの口調だ。

普段は温和なツマエの怒りは、某アニメの『クマのーさん』を見た直後、野生の<sup>リアル</sup>実物な熊を見て受ける衝撃に値する。

要は、そのギャップに戦慄が走るのだ。

私は取り繕うように咳払いを一つした。

「ああ……おまえを疑っているわけじゃないんだ。その、なんだ……その間に誰かキッチンに来なかつた」

「来てません」

うおっ！ 私が最後まで言い終わらぬうちに答えてきた。

しかし、ここで怯んではいけない。

「そんなわけないだろ！ 私は確かに冷蔵庫に入れた！ 蟹の横だつたと記憶している！」

「……」

「しかし、蟹の横にも無ければ、いつもの場所にもない！ 誰かが取ったとしか考えられん！！」

そう声を荒げて言うと、ツマエがスツと立ち上がった。

私を含め、三人でまたビクリと身体を震わせる。

「……」

身を仰け反らせる私たちをよそに、ツマエは黙ってリビングを出て行ってしまった。

残された三人で、これから起こるかもしれない惨劇の予感にソワ

ソワしている、ツマエが静かに戻ってきた。

そうして、そのまま私の横で仁王立ちをする。

「ひ、ひ、人の話の途中に、ななな、何をしていたんだ！」

ツマエを見上げて怒鳴るが、声の上擦っているのが自分でも分かった。

「……………」

黙ったまま仁王立ちしていたツマエの腕が振り上げられた。

「ヒッ！」

私が思わず情けない声を漏らしたその直後

ダンッ！ とテーブルを叩く強烈な音だった。

三人とも肩をすくめ、目を瞑<sup>つぶ</sup>っていた。

「……………」

しかし、テーブルを叩いた音の後は静寂が広がり、私は恐々と片目を開けた。

すると目にしたのは

「なっ！ 一体何処に……………」

私は驚き、これでもかと言わんばかりに目を見開いた。

テーブルの上にはビールが 間違いなく、私が買ってきたビールが置かれていた。

「ツマエ………… おまえだったのか？」

ツマエを見上げ、そう問いかけた私にツマエがボソリと呟く。

「蟹……………」

「え、なに？ かに？」

「蟹………… 明日、食べようとしたんです」

「？」

「だから解凍しやすいように、『冷凍室から冷蔵庫に移しておいた』んです……………」

「冷凍室から………… 冷蔵庫？ ……っ！」

私はそこでハツとし、記憶が鮮明に甦った。

風呂から上がり、冷蔵庫を開けた。

ビールは『蟹の横』にも、牛乳の横にも無かった。

私は『冷蔵庫を見ていた』のだ。

元々、ツマエが蟹を置いてのは『冷凍室』。

私はいつもの牛乳の横に置けなかったので、まだ移動される前の『冷凍室にあった蟹』の横にビールを置いたのだ！

そう、私はビールを冷凍室にしまった。

ちようどその方が、風呂上りにキンキンに冷えてると思って……。

「……」

気まずい。とても気まずい空気がリビングを覆う。

刺さるような視線が痛すぎる。

…

……

……

「アハ！ 父さん、勘違いしちゃった……テヘッ！」

この後一ヶ月、私は家族から『存在しない人』として扱われることとなる。

テーブルでは、キンキンに冷えたビールが、まるで泣いているように濡れていた……

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2451c/>

---

誰が盗った

2008年11月7日07時23分発行